

国際フォーラム
きょう企画会議
広野町
広野町は十二日、九
月に町内で開く「幸

せな帰町・復興」に向
けた国際フォーラム」
（仮称）の第一回企画
会議を開く。

国際フォーラムは、
幸せな帰町とは何か、

本県の復興には何が必
要かを各界各層の町民
に考えてもらうのが目
的。昨年六月、町内で
開いた国際シンポジウ
ムの後継事業として企
画した。九月十四日か
ら二十日にかけて開催
する。

後一時半から町役場で
開かれる。町民有志や
学識経験者、町の担当
職員ら約三十人が出席
する。国際フォーラム
の期間中に催すワーク
ショップの内容や、海
外からの研究者と町民
との共同活動の内容な
どについて協議する。

9月に広野で 国際フォーラム

「帰還・復興」課題探る

広野町は9月、町内に海
外の研究者らを招き、町の
住民帰還や復興の課題など
を探る「幸せな帰町・復興」
に向けた国際フォーラム
（仮称）を開く。1週間の
日程で研究者と住民の意見
交換やシンポジウムなどを
計画、同町から復興に向け
たメッセージを発信する。

昨年、町が初開催した国
際シンポジウムに続き、9
月14、20日に実施。県立中
高一貫校「ふたば未来学園
高校」の生徒も参加予定。

初の企画会議、意見交換

広野で9月 国際フォーラム

広野町が九月に開催する「『幸せな帰町・復興』に向けた国際フォーラム」（仮称）の

第一回企画会議は十二日、広野町役場で開かれた。

町民代表や学識経験者、町職員、ふたば未来学園高の教員ら約三十人が出席。事務局が国際フォーラムの目的

や日程、企画会議の位置付けなどについて説明した後、出席者がどのようなテーマでワークショップを開催するか、どのようなイベントがふさわしいかなどについて意見交換した。

ふたば未来学園高か

らは、海外視察をした生徒の報告会や、同校社会企業部の取り組みの発表、演劇の発表などの企画が提案された。

国際フォーラムは昨年六月に開催した国際シンポジウムの後継事業で、海外からの専門家、各界各層の町民が町の復興や将来について考え、意見を交換する場として企画した。九月十四日から二十日の一週間で、十四日から十九日にかけては多彩なテーマのワークショップやイベントを催し、最終日の二十日に町中央体育館でとりまとめの国際シンポジウムを開く。

幸せな帰還・復興考える

福島・広野町 初の企画会議

とワークショップなどで交流し、意見を交わした上で、最終日のシンポジウムに臨む。海外から十数人の研究者ら25人が参加した。

者が参加の見込みで、既に米国やスリランカなどの10人から内諾を得ている。企画会議では、町民や関係者が自由に議論し、ワークショップの内容や、シンポジウムのテーマを立案する。初回は町民有志や有識者ら25人が参加した。



国際フォーラムの内容について意見を交わした企画会議

9月に国際フォーラム

あすへ

東日本大震災

東京電力福島第1原発事故で避難した町民の帰還が課題の福島県広野町は9月14～20日、帰還と復興をテーマにした国際フォーラムを開催する。1週間に及ぶ期間中のプログラムなどを考える初めての企画会議が12日、町役場で開かれた。フォーラムでは海外の研究者らが4、5日間、町民

町内に今春開校したふたば未来学園高は、海外研修に参加する生徒の報告会や、劇作家平田オリザ氏が指導する演劇の発表などを提案。他の出席者からは仮設住宅での交流会や、廃炉・除染作業員を巻き込んだ取り組みなどが出された。

企画会議は今後、随時開かれ、6月下旬に大枠のプログラムをまとめる予定。町復興企画課の担当者は「関係者が本音で話す場をつくり、海外研究者を交えて、幸せな帰還、復興とは何かを考えたい」と説明する。広野町は昨年6月に初の国際シンポジウムを開催している。

広野から「震災」考える

9月国際フォーラム

10超える講座開催へ

広野町は1日、同町役場で9月に国内外の研究者らを招いて同町などで開催する国際フォーラムの企画会議を開き、期間中、町の震災復興や住民帰還などをテーマに10を超えるワークショップを開く方針を確認した。

も予定している。

町は町民に参加を呼び掛けるほか、福島大や東京大などの研究者や今春開校した県立中高一貫校「ふたば未来学園高」の生徒らも参加。初日の14日にオープニングセレモニーを行い、ワークショップでは、被災地の広域連携や幸せな住民帰還、風評被害対策などの幅広いテーマで議論を行う方向で検討している。

幅広いテーマ 議論



国際フォーラムの開催に向けて協議する関係者ら

国際フォーラムは9月14日～20日の7日間、同町や町民との意見交換を行い、民が多く避難するいわき市内などで開く。国内外の研究者やジャーナリストらを信ずる。交流イベントなど

会議では、名称を「国際フォーラム『被災地・広野から考える』」に決定。関係者がワークショップやシンポジウムの運営の在り方について意見を交わし、冒頭あいさつで遠藤智町長は「どれだけ時間が過ぎたかではなく、復興がどれほど進んだかを考える時期。フォーラムを通じて復興に歩んでいきたい」と語った。

復興 あしたへ

の
野
フォーラム
国際
広

スローガン決める

「あっぱれ！ ふたばく未来へ」

広野町が九月に町内で開催する国際フォーラムの第三回企画・運営会議は四日、町中央体育館ミーティングルームで開かれ、スローガンを「あっぱれ！ ふたばく未来へ」と決めた。

町民有志や大学関係者、町職員ら約三十人が出席した。国際フォーラム全体の流れやワークショップ、交流イベントの検討状況などが報告された。出席者

からは「事前登録が必須か、参加自由かなどを明確にすべき」「町外からの参加者向けに、町内のお店などの情報を盛り込んだパンフレットが必要」などの意見が出された。

冒頭、遠藤智町長は「九月の本番に向けて貴重な意見をいただき、有益な時間としてほしい」とあいさつした。



スローガンを決めた第三回企画・運営会議

復興メッセージ発信へ

14日から広野で国際シンポ

国際フォーラム「被災地・広野町から考える」

広野町は14、20日の7日間、町内に海外の研究者らを招いて復興の課題などを考える国際シンポジウム「被災地・広野町から考える」を開催する。3日に同町役場で運営会議が開かれ、シンポジウムの概要が決まった。

復興 あしたへ

ワークショップ多彩に

期間中は、被災者と国内外の研究者、学生や受け入れ側の住民らが参加するま

さまざまなテーマのワークショップが町内で開催される。日程は【表】の通り。初日の14日にオープニングセッションを行い、最終日の20日に開かれるシンポジウムでは、ワークショップなどの成果を基に復興に向けたメッセージを発信する予定。

ワークショップは、被災地の広域連携や風評被害払拭に関する議論やふたば未来学園高校生による地域課題をテーマにした演劇の発表などが行われる。合

せて、町内外からの参加者と住民の交流会なども開催する。

海外からは研究者やジャーナリストなど約15人が参加を予定している。

ワークショップやシンポジウムは一部を除き、一般に公開する。

問い合わせは広野町復興企画課（電話0240-21251）へ。

14日	オープニング	開会式	14日午後5時	町中央体育館
15日				
オープニング	被災地・避難者受け入れ地の連携を考える	基調講演	午前10時	町中央体育館
		非公開	午後2時	町役場
16日				
被災者と受け入れ者とのお茶会トーク ママ・パパIDOBATA会議@ひろの	被災地の広域連携を考える	仮設住民と受け入れ者が対話	前9時	町中央体育館
		子育て世代らフリーディスカッション	前10時	町保健センター
		広域連携をテーマに議論	後2時	町中央体育館
17日				
これからの農業と地域づくり 「広野町の安全安心」を考える 風評被害を考える 5、10、30年後の自分、町を考えよう		農業再生について議論	前9時	町中央体育館
		現状報告やパネルディスカッション	前10時	同
		海外の事例など紹介	後2時	同
		対話形式で将来の課題を探る	後2時	同
18日				
ふたば未来学園演劇発表 町民のこれからの健康について ジャーナリストの役割		高校生が演劇発表	前11時	町中央体育館
		町の取り組みや今後の課題を探る	後1時30分	町保健センター
		ジャーナリスト、研究者らが対話	後2時	町中央体育館
19日				
町民と大学生で未来を考えよう 福島のことを知ろう		大学生が被災地実習の成果発表	前10時	町中央体育館
		福島の課題から町の今後を考える	前10時30分	同
20日				
シンポジウム		復興メッセージを発信	前9時	町中央体育館

今月14日から20日まで広野町で国際会議が開催される。名前が長い。〈あつぱれーふたばー未来へ〉の言葉から始まり〈国際フォーラム「被災地・広野町から考える」〜幸せな帰町・復興に向けて〜〉という正式名が続ぎ、英語の標語「from “Early Return” to “Happy Return”」が添えられている。

「あつぱれ」は「集まろう、集まれ」を意味するこの地域の方言で「天晴」とも掛かる。広野だけでなく被災地全体が共に未来に向かおうとの願いがある。被災地全体の復興を目指さず限り本町の復興はできない。そんな思いをこめた女性役場職員の発案による。

町民有志と被災地で活動する専門家から成る『国際フォーラム企画・運営会議』が、手作りで準備を進めてきた。取り上げるテーマ(セッション)も同会議で提案、選定され、被災者の視点に立つ幅広いものとなった。詳しくは広野

座標



町のホームページでも賣いだくとして、幾つか例を挙げる。

被災者のさまざまな不安(帰町民数より滞在作業員数が多いなど)を見つめる「広野町の安全安心を考える〜いろいろな不安を言うべー会〜」。被災地復興の大きな課題「被災地の広域連携を考える〜被災地の温度差を見つめよう〜」。被災者と受け入れ者との関係を考えておこなう「被災者と受け入れ者とのお茶会トーク」。復興に向けて大事なテーマがそろつた。

今回の国際フォーラムは昨年開かれた国際シンポジウムの延長線上にある。昨年は、子育で中代の

原発と地球の未来問う

広野町で国際会議

女性と中学生だけが登壇する異色のものとなった。同中代の帰町が進んでいないからである。また仮設住宅における町民と海外専門家との対話で、予期せぬ本音の交流が生まれた。異文化交流の持つ不思議な力に気付いた瞬間である。

この体験が、海外からの参加者を含めて仮設住宅に泊まり込むという今回の大胆な発想につながった。実現は、仮設住宅管理人の献身的な支援のたまものである。

最終段階で「どうして国際会議か」との疑問が復興庁から出された。今回の原発事故に対する国際的な関心は極めて高い。地球の未来に関わる話だからだ。それだけに国際的に開かれた取り組みが求められるが、その認識は低い。これでは国際的な風評被害の払拭(ふっしょく)すら難しい。さらに言えば、全てを曖昧にする日本的なものが背後にある。原発を推進した責任を自問するしよつとしないう福島県、エネルギー源を域外

福島県広野町職員

尾田 栄章

(福島県広野町)

の原発に押し付けて平気な顔の首都圏。日本的なあしき側面を打破するには他者の目が欠かせない。

期待を一つ。この国際フォーラムが将来的には、『アートと賢智で被災地を結ぶプロジェクト』の一翼を担うこと。大地に根差したアートと同様に、人類の根源的な課題への国際的な取り組みは、この地の復興の基盤になるはずだ。

国際フォーラムはオープンで参加自由。会場は広い体育館。バーベキュー交流会などの交流イベントや、最終日には参加者全員が「言いたいことを言うべー会」がある。

ぜひとも参加ください。

「幸せな帰町」 意見交わそう

国際フォーラム
14日から福島・広野

東京電力福島第1原発事故で一時全町避難し、町民の帰還が課題となっている福島県広野町は14～20日、国際フォーラム「被災地・広野町から考える 幸せな帰町・復興に向けて」を開催する。多彩なワークショップや交流行事を展開し、原発事故被災地全体の復興について意見を交わす。

海外からは米国やインドネシア、スリランカ、フランスなどの研究者ら約15人が参加する。主会場は町中央体育館。14日に開会式、

あすへ

東日本大震災

15日には海外の3人による基調講演がある。

ワークショップは15～19日。町内に3000人以上の作業員が住む現状などに対する被災者の不安を話し合う「広野町の安全安心を考える」をはじめ、「風評被害を考える」「これから農業と地域づくり」など計14プログラムを用意した。最終日の20日は、総括のシンポジウムを開く。

交流行事は、海外からの参加者と町民がいわき市の仮設住宅で家庭料理を味わう食事会などを予定する。

海外からの参加者は期間中、仮設住宅に宿泊する。

広野町の担当者は「誰でも参加できる。ワークショップや交流会で、日頃感じていることを自由に話してほしい」と呼び掛ける。連絡先は町復興企画課0240（27）1251。

広野から復興発信

国際フォーラム開幕 20日まで

国際フォーラムであいさつする遠藤町長と決意を述べる大和田さん



東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興の現状を国内外に発信する広野町の国際フォーラム「被災地・広野町から考える―幸せな帰町・復興に向けて」が14日、同町で開幕した。20日まで海外研究者や住民、学生らが復興について考える20を超えるワークショップが繰り広げられ、最終日のシンポジウムで復興のメッセージが発信される。

20を超えるワークショップ

アジアや欧米などから15人の海外研究者やジャーナリストを招き、昨年に続いて開催。今年は日程を1週間に拡大した。初日は同町で開会式が行われ、遠藤智町長が「さまざまなテーマ

で被災地の視点から復興の課題などを考えたい」とあいさつした。

田谷聡復興庁福島復興局長、松本幸英櫛葉町長、鈴木紀昭広野町議会議長の祝辞に続き、海外招待者を代

表して米国のカール・ブルック環境法研究所国際部長が「われわれはさまざまな災害を体験しており、広野から学ぶことも多い。色々なアイデアを出したい」と語った。また、今春開校し

たふたば未来学園高1年の大和瑠華さん(16)が「昨年の国際フォーラムをきっかけに地域のことを考えるようになった。高校生だからできることを精いっぱい頑張りたい」と話した。

国際フォーラムの日程は【表】の通り。復興などをテーマにしたさまざまなワークショップが開かれるほ

か、海外招待者や学生、被災者との交流会も予定されている。

15日は基調講演としてチエルノブイリ原発事故の取材を続ける仏ジャーナリストのクロード・マリー・パドローさんらによる講演などが行われる。問い合わせは広野町復興企画課（電話0240-271251）へ。

国際フォーラム「被災地・広野町から考える」

15日			
オープニング(基調講演)	午前10時	町中央体育館	
被災地・避難者受け入れ地の連携を考える(非公開)	午後2時	町役場	
16日			
被災者と受け入れ者とのお茶会トーク	前9時	町中央体育館	
ママ・パパIDOBATA会議@ひろの	前10時	町保健センター	
被災地の広域連携を考える	後2時	町中央体育館	
17日			
これからの農業と地域づくり	前9時	町中央体育館	
「広野町の安全安心」を考える	前10時	同	
風評被害を考える	後2時	同	
5、10、30年後の自分、町を考えよう	後2時	同	
18日			
ふたば未来学園演劇発表	前11時	町中央体育館	
町民のこれからの健康について	後1時30分	町保健センター	
ジャーナリストの役割	後2時	町中央体育館	
19日			
町民と大学生で未来を考えよう	前10時	町中央体育館	
福島の今を知ろう	前10時30分	同	
20日			
シンポジウム	前9時	町中央体育館	



広野町や双葉郡の復興などをテーマにした国際フォーラムのオープニングセレモニーであいさつする遠藤町長（中央）

広野の復興考える 国際フォーラム開幕

広野町の「幸せな帰町・復興」に向けた国際フォーラム「被災地・広野町から考える」は十四日、開幕し、町中央体育館でオープニングセレモニーが開かれた。二十日ま

でワークショップや交流イベントなど多彩な催しを開き、広野町や双葉郡の復興、まちづくりについて考える。国際フォーラム企画・運営会議の主催。「あつばれ（集まれ）！ふたば未来へ」をスローガンに、昨年開催した国際シンポジウムを受けて企画した。開会式では、町民代

表の田村弘一さんが国際フォーラムの開会を宣言、遠藤智町長が「国内外の有識者と町民とが率直に意見を交換し、広野町や双葉郡の復興の一助となることを期待する」とあいさつした。田谷聡復興庁福島復興局長、松本幸英檜葉町長、鈴木紀昭町議会議長が祝辞を述べた。

米国環境法研究所のカール・ブルック国際部長と、ふたば未来学園高の大和田瑠華さん（一年）が国際フォーラムへの期待、決意を発表した。

幸せな帰町へ対話再び

福島・広野 国際フォーラム開幕
被災者の視点で復興探る

福島県広野町を会場に、東京電力福島第一原発事故

からの復興を考える国際フォーラム「被災地・広野町



国際フォーラムの開会式であいさつする遠藤町長

から考える 幸せな帰町・復興に向けて」が14日、開幕した。海外から15人の研究者らを招き、20日までワークショップや交流行事を実施する。

町中央体育館での開会式には80人が出席。遠藤智町長が「さまざまなテーマを被災地の視点から本音で語り合い、被災地全体の復興

あすへ

東日本大震災

に向けて歩みたい」とあいさつした。

昨年6月に町が初めて主催した国際シンポジウムに参加した米国の環境法研究所国際部長カール・ブルック氏は「昨年に続き、対話を継続できることをうれしく思う。いろいろアイデアを出して、皆さんの参考になればと願う」と述べた。

期間中、海外の研究者らはいわき市の仮設住宅に宿泊し、避難中の町民と交流。最終日の20日は総括のシンポジウムを開き、メッセージを国内外に発信する。

昨年、パネリストを務めたふたば未来学園高1年の大和田瑠華さん(16)も「フォーラムで広野町が復興のきっかけを得られると信じている」と話した。

海外研究者ら防災報告

広野 国際フォーラム基調講演



広野町の国際フォーラム「被災地・広野から考える 幸せな帰町・復興に向けて」の基調講演が15日、同町で行われ、海外から招かれた研究者やジャーナリストら3人が、インドネシアで2004（平成16）年に発生したスマトラ島沖地震後の防災対策やチェルノブイリ原発事故の現状などを報告した。

巨大な津波で22万人を超える犠牲者を出したスマトラ島沖地震の避難者などについて研究を行っているイ

ンドネシアのアングラス大のシャフディン・カリミ経済学研究所長は、同地震後に整備された同国の防災対策などを説明し、「（インドネシアでは）防災法整備をきっかけに、国家だけでなく誰もが防災について考えを共有するようになった。このフォーラムを通じて、われわれも防災力を高めていきたい」と語った。写真。また、仏ジャーナリストのクロード・マリー・バドローさんが、継続的に取材しているチェルノブイリ原発事故の現状を報告した。同フォーラムは14日から20日まで開かれている。問い合わせは広野町復興企画課（電話0240-271251）へ。

広野・国際フォーラム

被災地連携で熱い、議論



ワークショップで意見を交わす参加者

広野町で14日開幕した同町の国際フォーラム「被災地・広野から考える―幸せな帰町・復興に向けて―」は15日から、海外からの参加者や住民らが被災地の復興などについて意見を交わすワークショップや交流会などが始まった。被災地の広域連携や教育などをテーマに国内外からの参加者が熱

のこもった議論が続けている。

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興の現状を国内外に発信する目的で昨年始まった同フォーラムは今年、20を超えるワークショップやさまざまな交流事業を企画。15日には町中央公民館で海外から訪れた研究者らと住民、町内の高校生らがバーベキューを楽しみながら交流を深めた。

16日には多彩な視点から復興について考えるワークショップが本格的に始まった。町中央体育館で行われたワークショップ「被災地の広域連携を考える―被災地の温度差を見つめよう―」では、塩谷弘康福島大行政政策学類教授らをコーディネーターに被災地の広域連携の在り方や復興の状況の変化に伴う「温度差」について参加者が議論。教育の連携については赤司展子双葉郡教育復興ビジョン推進

協議会スーパーコーディネーターが「各町村の復興状況の変化で広域でやるもの、それぞれの町村がやるもの、そのすみ分けが必要になっている」と指摘した。

期間中は農業再生やふたば未来学園高の生徒による

演劇発表などさまざまなワークショップが予定されており、議論で出た意見は最終日の20日に行われるシンポジウムで発表する復興メッセージに生かす。問い合わせは町復興企画課（電話0240-1251）へ。

復興 あしたへ

海外の研究者と仮設住宅の町民が交流した食事会



海外研究者 仮設で交流

いわき 宿泊、住民と食事会

東京電力福島第1原発事故に伴い一時全町避難した福島県広野町で20日まで開催中の国際フォーラム「被災地・広野町から考える幸せな帰町・復興に向けて」の一環として、町民が

あすへ

東日本大震災

避難するいわき市の仮設住宅で16日夜、海外の研究者15人と住民との食事会が開かれた。

約50人の住民が参加。研究者が作った「タイ風レッドカレー」「スリランカ風豆カレー」を味わいながら交流を深めた。レッドカレーを食べた猪狩俊さん(67)は「少し辛いけど、食べたことのない味でおいしい」と話した。

海外の研究者らはフォーラムの期間中、仮設住宅に宿泊し、住民の生の声を聞いている。

インドネシア・アングラス大経済学研究所長のシヤフルディン・カリミ氏は「きょう(16日)は7人の町民と話した。多くの人が仮設でのコミュニケーションや生活を良いと感じ、広野町での生活には健康や医療に不安を持っていると知った。仮設での宿泊は私の人生の中でも素晴らしい経験だ」と語った。

作業員たちとどう共生

廃炉や除染、復旧事業のために全国から来る作業員と、住民たちはどう共生できるか――。避難先から戻った町民約2200人を上回る約3千人の作業員が暮らす広野町で17日、町職員や警察官、建設会社員らがパネルディスカッションで意見を交わした。

14日から町で開かれている国際フォーラムの一環。町復興企画課の飯島洋一課長補佐は、町内の宿

舎などで見知らぬ作業員が生活する状況に不安を感じる町民が多いため、宿舎の集約を検討していることを説明。必ずしも町民や作業員がお互いの交流を望んでいるわけではないとして「言葉をかけ合える環境になるには時間がかかる」と語った。

双葉署広野駐在所の三瓶和紀巡查部長は、作業員による犯罪で町民に被害があったケースはほとんどない、とした。清水建設福島復興プロジェクト室の高木光雄室長によると、下請け企業と協力して作業員の身元を確認し、住民の苦情などを現場に伝えることなどに力を入れているという。

広野でフォーラム

会場からは、作業員の仕事や生活の様子について「住民に何も伝わっていない」という意見が出た。司会を務めた福島大うつくしまふくしま未来支援センターの高木亨・特任准教授は「交流以前に、お互いを知ること努力しなければいけない」と指摘した。

シンポジウムで復興
のメッセージを発表
する遠藤町長ら

「被災地の活動 世界に」



広野でシンポジウム

復興メッセージ発信

広野町の国際フォーラム「被災地・広野から考える―幸せな帰町・復興に向けて」のシンポジウムは20日、同町で開催され、期間中の議論などを踏まえ、遠藤智町長らが「被災地の活動を世界に伝え、世界の課題解決に貢献する」とする復興に向けたメッセージを発信した。

メッセージには、世界に絶対的な安全はないとして自ら情報を収集し、自分の責任で判断を行う必要があることや、住民の意見を適

切に反映させて実行に移す透明性の高い新たなシステムを構築する必要性なども盛り込んだ。遠藤町長は「課題への国際的取り組みは地域の復興の基盤となる。その思いを心に刻み、心一つに歩んでいきたい」と語った。

シンポジウムには町民や海外研究者、県内外の学生、行政関係者ら約70人が出席。メッセージ発表に先立ち、復興などをテーマに期間中に開催した20を超えるワークショップの成果が報告され、その後、参加者が東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の教訓をどう復興に生かすかについて意見交換した。

フォーラムに参加したインドネシアのアングラス大学のシャフティン・カリミ経済学研究所長は「世界には災害についてのさまざまな課題があり、われわれも災害に直面している。問題を共有し、学ぶことができたことには大変意義があった」と語った。



「被災地・広野町」からのメッセージを発信する遠藤町長(中央)と参加者

古里広野の復興誓う

国際フォーラムが閉幕

広野町の国際フォーラム「被災地・広野町から考える『幸せな帰町・復興』に向けて」は最終日の二十日、取りまとめのシンポジウムを開き、「世界の多様な目で学び合うことが有意義であることを学んだ。今回得られた結果を発展させ、多様な交流を進める努力を続ける」とするメッセージを発信し、閉幕した。

海外から招いた専門家や日本の研究者、ボランティア、町民ら約百人が出席した。期間中に開かれた十五のワークショップの代表がそれぞれの成果を発表した後、「震災、原発事故の教訓」「今後、自分たちに何ができるか」をテーマに意見を交換した。メッセージでは、復興に向け必要な取り組みとして①可能な限り情報収集し、その情報を誰もが閲覧できる環境を整備する②より良い社会の在り方を住民と共に模索し、解決策

を見つけ出す③住民の意見を適切に反映し実行するシステムを構築する―などを挙げた。国際フォーラムの成果も盛り込んだ。

遠藤智町長は「国際フォーラムで新たなコンセプトを見いだすことができた。私たちは自立自助の精神で愛する古里を守り、必ず復興再生することを誓う」とあいさつし、メッセージを読み上げた。

国際フォーラムは、広野の復興やまちづくりについて考えようと、国際フォーラム企画・運営会議が主催した。十四日に開幕し、ワークショップや交流イベントなどを繰り広げた。

広野国際フォーラム きょうシンポ

広野町で開催中の国際フォーラム「被災地・広野から考える―幸せな帰町・復興に向けて―」の国際シンポジウムは20日、同町中央体育館で開かれ、復興に向けたメッセージを発信する。19日には首都圏の住民らが

参加し、本県の復興の課題などを考えるワークショップなどが行われた。ワークショップには、海外研究者や地元住民のほか、首都圏の住民や福島大の学生らが参加。双葉郡の被災地視察などを行った



後、講師役の開沼博福島大特任研究員が本県の復興の

状況を紹介した。写真。

フォーラム最終日のシンポジウムは午前9時から開かれ、海外研究者や住民ら出席者が被災地の復興について自由に意見を出し合い、約1週間のフォーラム期間中、さまざまなテーマで行われたワークショップの議論も踏まえた復興のメッセージをまとめる。

あすへ

東日本大震災

国内外の研究者や行政関係者ら約70人が12グループに分かれ、「東日本大震災

をを行った。
東京電力福島第1原発事故で一時全町避難した福島県広野町で開いていた国際フォーラム「被災地・広野町から考える 幸せな帰町・復興に向けて」は最終日の20日、総括シンポジウムを行った。

再生の道筋 共に模索

福島・広野 国際フォーラム閉幕



原発事故の教訓などを話し合った総括シンポジウム

と原発事故で感じた不満と教訓」「教訓を踏まえ何ができるか」を討議。「原発

事故では正しい情報発信が不可欠」「行政と被災者をつなぐ独立機関が必要」などの声が上がった。

期間中に開いた14のワークショップなどでの意見を基に①より良い社会の在り方を共に模索し、解決策を見つけ出す試みが復興につながる②住民の意見を適切

に反映し、実行に移す仕組みの構築が求められるなど7項目のメッセージを発信した。

閉会式で遠藤智町長は「国際的な取り組みは地域復興の基盤となる。自立自助の精神で古里を守り、必ず復興することを誓う」と述べた。

国際フォーラム 本音話し合った

広野町長、終了あいさつ

広野町の遠藤智町長は24日、国際フォーラム「被災地・広野町から考える」の終了あいさつのため福島民友新聞社を訪れた。

遠藤町長は「フォーラムでは双葉郡8町村の職員が本音で話し合う場面もあった。避難指示が解除された檜葉町には広野町の経験を伝え、どんどん復興してもらうことが大事だと思っている」と語った。写真。



国際フォーラム 終了あいさつ

遠藤広野町長来社

広野町の遠藤智町長

写真は二十四日、

国際フォーラム「被災地・広野町から考える」



る。『幸せな帰町・復興』に向けての終了あいさつのため福島民報社を訪れ、高橋雅行社長と懇談した。

遠藤町長は「二週間で延べ千人近くが足を運び、さまざまな出会いがあった。（双葉郡）八町村の職員の意見交換も意義があったと感じている。地域連携という思いを深めて終えることができた。次につないでいく」と語った。

遠藤町長は「二週間で延べ千人近くが足を運び、さまざまな出会いがあった。（双葉郡）八町村の職員の意見交換も意義があったと感じている。地

東日本復興

特報版

東日本復興特報版は、毎週火、木曜日の
北海道・東北版に掲載します。

363

異文化交流で本音引き出す

国際フォーラム「被災地・広野町から考える」

1 週間にわたる会期中には、役場若手職員による「被災地・避難者受入地の連携を考える」「被災者と受入者とのお茶会トーク」「ママ・パパIDOBATA会議」「風評被害を考える」「5年、10年、30年後の自分」我が

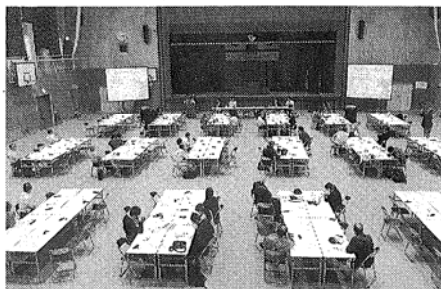
「あゆめるステーク・ホルダーがお互いに本音の声を交換できる場」をつくり、海外研究者を交えて広野町民の「幸せな帰町・復興」とは何かを探ることを通じて、広野町のみならず福島全体の復興を考えることが狙い。

昨年6月開催の国際シンポジウムで発表された「広野」からのメッセージを受け、



福島第一原子力発電所の事故により、一時全町避難指示が出された福島県広野町で、町民の帰町を促す国際フォーラム「被災地・広野町から考える」が、町中央体育館を主会場に、14日から20日までの7日間にわたって開かれた。国内外の研究者と町民らが交流を深めながら、さまざまな視点から帰還に向けた課題や方策などを論じ合った。

「世界が目まぐるしく変わっている」と話す事務局を務める尾田氏



中央体育館を主会場に7日間にわたって開かれたフォーラム(上)。多彩なテーマでワークショップも行われた



フォーラム(下)。多彩なテーマでワークショップも行われた

課題洗い出しへ多彩なイベント

日だけでは議論があまりにも少ないため1週間にした。その意味では昨年度の発展形だ」と語るのは、同フォーラムの事務局を務める元建設省(現国土交通省)河川局長で、2013年4月から福島県の任期付職員として広野町で勤務している尾田栄章氏だ。昨年度の開催で「仮設住宅まいの方々はなかなか本音をおっしゃらないが、外国人と通訳を介して話すと思わず本音が出てくる。それを受けて異文化交流が非常に大事だと気づいた」とし、「世界の人がFUKUSHIMAに注目している」と話す。これを裏付けるように、今回も海外から多くの研究者が参加。このうち、実際に仮設住宅での寝泊りを体験したダナン大(ベトナム)客員教授のレフ・ティ氏は、その設

備と効率的な設置プロセスを絶賛しつつ「仮設に住むことで被災地を身近に感じ、いままでとは全く違う視点を持つことができる」と実体験と交流の重要性を指摘。その上で「高齢者が多く若者はいなかった。若い世代は仕事を求めて別な所に住んでいるのだから。人口の移住を考える上で興味深い事例だ」と、仮設住宅に対する現状認識を「本音で語るなど、異文化交流の成果も垣間見えた。

一方尾田氏は、帰町が進まない背景を「人口減少傾向の中での過疎化の進行という大きな背景の中で原発事故が起り、過疎化が一気に加速したことが一番大きい。また、避難先がいわき市や郡山市などの都市域で、町より便利なところで生活し慣れてしまったため、戻ることには遠慮(しゅんじゅん)がある」と分析しつつ、今後の課題について「町村行政において、役場職員が新しいことに取り組もうとする意欲をかき立てようとする、ソフト面での仕組みづくりが必要だ」と訴える。

9月5日には隣接する檜葉町で避難指示が解除されるなど、原発事故の影響を受けながらも少しずつ復興への道を歩き始めた自治体が出始めた中、広野町における挑戦とその成果は、福島県沿岸部における被災地再生への試金石となりそう。

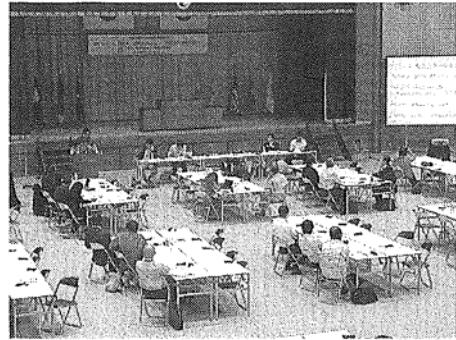
“幸せな帰町・復興”に向けた国際フォーラム
～ 被災地・広野町から考える ～

■ 日刊建設産業新聞 2015年 9月28日(月) 掲載

被災地・広野町から発信 将来のまちづくり語る

“幸せな帰町・復興”に向けた国際フォーラム

福島第一原子力発電所の事故で避難した町民の帰還が課題となっているなか、福島県広野町で町・復興に向けて14日から6日間



15ものテーマでワークショップを展開

開かれている国際フォーラム『被災地・広野町から考える』“幸せな帰町・復興”に向けて14日から6日間、延べ1300人が参加した。フォーラムは、広野町の町民有志と被災地で活動する専門家・運営会議が手作りで準備を進めてきたもので、東北地方15ものテーマでワークショップを展開し、被災地から参加した専門家などが仮設住宅に宿泊しながら交流イベントを行うなど、故郷の復興に向けて本音で語り合った。

異文化交流で熱く議論

企画・運営会議の事務局を務める尾田栄章氏に国際フォーラムの開催意義を聞いた。



おだ・ひであき
1941年福井市生まれ。67年京都大学大学院を修了し、建設省入省。98年河川局長で退職。2013年4月より福島県庁で勤務。2014年4月より広野町役場に勤務。

「今年の国際フォーラムのねらいは、広野町の将来を考えるためには、被災地全体が復興に向かわなければならぬ。フォーラムそのものの準備を町民と地元で汗を流している研究者が一緒になって進めるための枠組みをつくり、企画・運営会議で準備を進めてきた。昨年行った国際シンポジウムの発展形が今年のフォーラム。」

「帰還に対しての課題は人口減少による過疎化が進行している。その背景のなかで起きたのが福島第一原発事故であり、それによって過疎化がさらに加速している。広野町からの避難先がいわき市や郡山市などの都市部。便利な生活に慣れてしまい、戻るといふことに関しては逡巡がある。」

「今年3月に常磐道が全線開通したことによる影響は、道路などのインフラは重要ではあるが、帰還への十分な条件とまではならない。一番足りないものは町村行政において、新しいことに取り組もうとする意欲を掻き立てるようなことがないこと。復興に向けてどうするかは、地方自治体を預かっている人間の責務だと思う。町民は避難を強いられた被害者ではあるが、復興は自らがやるしかない。そこに気づき、まちを良くしていこうと切り替えてもらえらることを期待している。」

“幸せな帰町・復興”に向けた国際フォーラム
～ 被災地・広野町から考える ～

■ 建設新聞 2015年 9月 25日 (金) 掲載

帰町・復興テーマに国際フォーラム

ワークショップや交流イベントなど多彩に

福島県広野町

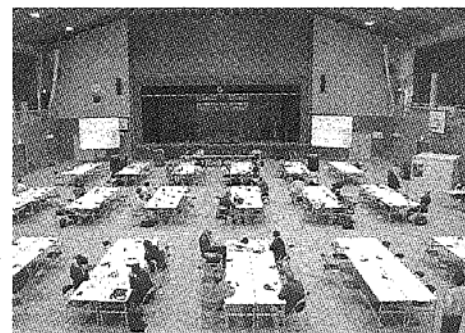
福島県広野町で国際フォーラム「被災地・広野町から考える」が14日から20日まで開かれた。東北地域づくり協会が協力。1週間にあわたってワークショップ

プや交流イベントが繰り広げられ、原発事故の影響を受けた被災地の「幸せな帰町・復興」への道筋を探った。

広野町と町民有志、被災地で活動する専門家で構成される「国際フォーラム企画・運営会議」が主催した。

海外の学識経験者を交え、被災地の広域連携、これからの農業、「5年、10年、30年後の自分、わが町」などをテーマに意見交換を行ったほか、バーベキュー交流会、広野町ウォーキング、「各国料理と日本の家庭料理の食事会」といった交流イベントを通じて市民と対話する機会を多く設けた。

意見交換で町民は、震災後の現状について「里山の景色は変わらないが、あら



ゆる面で違和感がある」と心情を訴えたほか、避難者が帰らない理由について「子どもが学校に通っており卒業するまでは残りたいとか、病院が少ないなど個人個人の思いがある」と指摘する声もあった。

広野町企画課に在職する、元建設省河川局長の尾田栄章氏は今回のフォーラムについて「被災地のことは世界が注目している。住民が本音を言い合える場を持ちたかった」と話していた。

■ 日刊建設工業新聞 2015年9月24日(木) 掲載

「幸せな帰町」への道筋考察

福島・広野町 復興国際フォーラム 被害者の立ち位置から脱却を

復興国際フォーラムの
メイン会場



福島県広野町は14日から20日まで1週間にわたって復興国際フォーラムを開催した。

被災地の町が復興への道筋を考える意見交換の場は、海外5カ国の学識者も交え、町民主体によるシンポジウムやパネルディスカッション、地域イベントなどにぎわった。フォーラム開催には東北地域づくり協会も協

力した。

フォーラムのテーマは「幸せな帰町」。震災被害と福島第1原子力発電所事故によって仮設住宅住まいや遠隔地への避難を余儀なくされた人々を、どうすれば呼び戻すことができるのか。被災地同士の広域連携、風評被害への取り組み、農業や地域づくりといった課題ごとに討論が繰り広げられた。

帰宅や帰町を目指す復興施策には、震災以前からの人口の自然減に加えて、避難先で培われている新しい生活基盤が立ち上がり、町にとって地域存続上の問題がついてまわる。町行政が呼び戻し策を展開しても、人口密度の低い過疎地より仮設住宅

事務局を務めた尾田氏



での近所づきあいの方が安心という意見や、子どもの教育期間が終わるまでは避難先から転居できないといった事情を持つ人々が、現実と本音を語り合った。

「道筋などのインフラだけでは復興や地域創生は不可能。街づくりのためのソフトを充実させなくてはならない」。フォーラム事務局の尾田栄章(ひであき)氏は同町復興企画課の任期付き職員だが、98年に退職するまでは建設省(現国土交通

省)の技術者で、中部建設局長、河川局長を歴任している。

その尾田氏が吐露する思いも、広野町の現実に直面してのものだ。

「町行政の責務は大きい。赴任して感じたのは、町の職員も地域住民も新しい仕事を始める意欲を失ってしまったことだった。これは2年半経

過しても変わっていない」「しかし、彼らの責任でないといえども、いつまでも被害者のなポジションにとどまってい



レー・フリー・タイ教授

られない。世界が目指していることを知らせたい。本音を言い合える場を持ちたい」。

そうした考えから、尾田氏はあえて1週間という長期間のフォーラムを企画し、討論会からバーベキュー大会まで、町民と行政、世界の学識者に対話させるコンテンツを仕掛けた。

海外から参加した学識者たちは実際に仮設住宅に宿泊し、自国の料理を振る舞うなど地域住民とのコミュニケーションを図った。

ベトナムから来日したダナン大学のレー・フリー・タイ客員教授は「技術者の視点で見た仮設住宅は、細部まで良くできた構造だと感心した。ただ、高齢者と子どもしか居住

していない。若者は仕事や個々の事情で仮設に住みたくないのだろう。まさに広野町の現実を物語っている」と感想を述べた。

尾田氏は「若い世代に期待している。自らがやらねばならない、という志に気づくことが大事だから」と語る。そのきっかけを、町民は欲している面も少なくない。

「常磐線広野駅前復興拠点の建設が進んでいる。これもインフラではあるが、作っているのは建設業に従事する人々だ。あのような場で、ゼヒリーディングカンパニーとしての気概を発揮し、地域へ還元してほしいと願っている」と、尾田氏は復興の「いま」を訴えた。